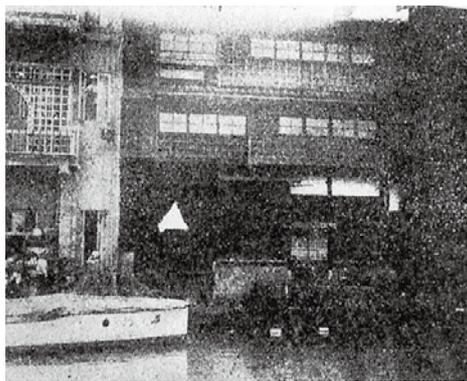


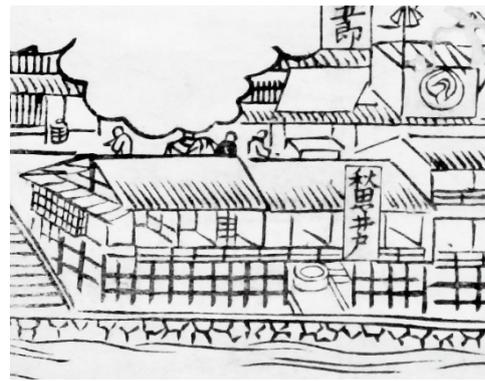
おおさか  
KEY  
ワード  
第50回

銘酒づくりから仕込みに

「道頓堀で召上るお酒は道頓堀の名水で」造られたとの説も。



こんなに川が近かった井戸、手前が道頓堀川。  
『上方』道頓堀変遷号より



『浪速茶利八景』の秋田屋の井戸、背後は芝居小屋。  
(大阪市立図書館 所蔵)

道頓堀開削400年を来年に控えた今年、安井道頓やすい どうとん（成安道頓なりやす どうとん）と道頓の紀功碑が地元有志によって修復を終え、7月12日に除幕式が行われた。石碑は開削300年の大正4(1915)年に建立されたが、傷みが激しく撤去されそうになっていた。また同じ7月、戎橋筋商店街振興組合が『戎橋とともに400年 なんば戎橋筋商店街100周年記念誌』を刊行した。私も一文を書かせていただいたが、歴史と文化ある商店街ならではの充実した内容である。

そこで今回は道頓堀にちなんだ話である。近代的な水道が整備される以前、淀川上流で採取した水を飲料水として売りに来る「水売り」という商売もあったほど、淀川河口に開けた大阪の水質は元々よくなかった。ところが、大正時代の雑誌『道頓堀』（道頓堀雑誌社）を読んでいて驚いた。

「昔から道頓堀には名水があると云ふ事が云ひ伝へられて居るが、これは中座前の芝居茶屋、近安の地下室にある井戸から、灘の銘酒を造るべく昔ながらの名水を汲出して居るところ、大きな桶に二杯ずつ毎日汲みに来る、何と皆さんがいつも道頓堀で召上るお酒は道頓堀の名水で造られて居るんですよ。」  
(『道頓堀の名水』『道頓堀』大正8年5月号)

中座前にあった芝居茶屋「近安」の井戸が名水で、酒造りのため灘から汲みにきたというのである。さらに昭和7(1932)年の『上方』道頓堀変遷号によると、「近安」の井戸こそ、『摂陽奇観』『古文鉄砲』など江戸時代の文献に残る「秋田屋の井戸」であると考証されていた。秋田屋は中座の東隣にあった饅頭屋で、浜側

で芝居茶屋も営んだ。『古文鉄砲』に収録された七言絶句によると、有名な「虎屋」もかくやという和菓子屋で、店舗は「頓河名物」と詠じられている。「頓河」は中国風に道頓堀川を略して言い換えたもの。“とんが”の響きがどことなくかわいい。井戸は秋田屋の芝居茶屋の方にあり、『上方』は雨で道頓堀が濁ると水をもらいに近所の人が集まったと記す。

確かに「秋田屋の井戸」は、江戸時代の道頓堀を描いた「浪花茶里八景」(表紙(大阪市立図書館所蔵)にも戎橋と太左衛門橋の間にあり道頓堀名物だったようである。(「浪花茶里八景」は『大阪春秋』第131号・特集ミナミに複製有り)。しかし、近代になって上水道が整備されたからであろう。昭和7年、工事のため井戸は当時の価格で一万八千円で売却され、歴史を終えた。川から見た井戸の写真が『上方』に掲載されているが、ほとんど道頓堀川近くにあり、これだけ川に近くて水質が良いのは不思議である。

道頓堀界隈の井戸では、国立文楽劇場の前に再現された「二つ井戸」が有名である。また、そこから東の高津宮から上町にも名水があったという。醸造では道頓堀松竹座地階に「道頓堀ビール」の醸造所があり、かつて宗右衛門町にあったキリンプラザでも地ビールが造られていた。

「秋田屋の井戸」も道頓堀の史跡として顕彰に値する存在だろう。中之島とともに“水都大阪”のイメージの中核である道頓堀であるからこそ、地域の歴史と“水”との関係を洗いざらい調べあげ、そのエキスを街づくりに役立ててもらいたい。